

宮古・八重山諸島のグスク時代出土の骨鏃様製品考

Bone Arrowhead-like Objects of the Gusuku Period in Miyako and Yaeyama Archipelagoes

盛本 勲

MORIMOTO Isao

ABSTRACT: This paper aims to compile the excavated bone arrowhead-like artifacts found in Gusuku period sites in Miyako and Yaeyama Archipelagoes. The artifacts are also morphologically classified, located in time scale, and discussed in regard to function.

As a result, over 119 specimens were found in 19 sites within the area. They are classified in three types and seven sub-types, and are assigned to a period between early 14th century and 16th century. As to their function, considering the form and other features, they should be regarded as missile implements like arrowhead rather than the jabbing tools like harpoon.

1. はじめに

グスク時代¹⁾に比定されている宮古・八重山諸島の八重山編年第三期（滝口(編)1960），中森期(金武1994・2004)を特徴づける出土品の一つに，「尖頭器」，「有柄の尖頭器」，「有茎の尖頭器」，「骨製尖頭器」，「骨製矢じり？」，「ヤス状骨製品」，「ヤス状骨器」，「鏃」，「骨鏃」などと呼称されている骨製品がある。

例示のように，当該製品の名称はさまざまであり，これについては後節にて改めて検討するとして，小稿では当該製品の用途・機能を検討するうえで基礎資料となる集成と形態分類，帰属時期などを明らかにし，用途・機能に関しての筆者の考えを提示したい。

なお，後述するように，筆者は当該製品の用途・機能について，形態や個々の製品の有する属性などの検討から，ヤスなどのような突き道具的なものではなく，鏃などのような飛び道具的なものであろう，と考えることから，標題の名称を使用する。

2. 名称および用途・機能に関する研究略史

はじめに，当該製品の名称および用途・機能について，簡単に学史的整理をしておきたい。

宮古・八重山諸島地域において，当該製品が最初に報告されたのは高宮廣衛・C, W, ミーヤンによる竹富町鳩間島の鳩間中森貝塚の発掘調査報告である（高宮廣衛・C,W,ミーヤン1959）。この報告において，1点のみ出土している当該製品に，高宮らは「ボーン，ポイント Bone point」と，英名の名称を与えた。

そして，翌1960年に発刊された早稲田大学調査団による八重山調査の報告においては（滝口(編)1960），石垣市山原貝塚より出土した11点について，「尖頭器」の名称のもとに，その形状などからA・B形の二種に形態分類を行い，A形の製作技法は，それまで報告されていた「鳩間中森貝塚例に類似するものの，年代の異なる沖縄本島の大山貝塚や徳之島の面縄第二貝塚とは異なる」と指摘とともに，A形は「八重山地方における一つの地方的・年代的一外耳系一特徴を示すものと思われる」と，形態や地域的，時期的比較を行っているものの，肝要な用途・機能についてはふれていない。

この早稲田報告において，与えられた名称の「尖頭器」は，高宮らが与えた英名の「ボーン，ポイ

ント Bone point」の「ポイント point」を邦訳して称されたものと思われる。

その後の報告は、この早稲田大学報告を踏襲したものと思われる「尖頭器」（三上(編)1980・"82, 関口他1981），あるいはそのほとんどが茎（柄）を有することから「有柄の尖頭器」（下地1993・下地(他)1993）「有茎の尖頭器」（阿利・黒島(編)1982），さらには骨製であることから「骨製尖頭器」（金武(他)1983）などと若干の相違は見られるものの、概して「尖頭器」という名称と、漁具のヤスを想定したと思われる名称の「ヤス状骨製品、ヤス状骨器」（阿利・岸本1984），「ヤス状骨製品」（大濱編2004）の二者に大別されるが、その用途・機能に関して、具体的に論じた報告は多くない。

当該製品の用途・機能に関して、比較的具体的に論じているのは、国分直一と牛沢百合子である。

国分は、自らも参画して1954年に実施された波照間島下田原貝塚の発掘調査成果などをベースに、八重山先史文化の系譜を台湾に求めるという研究の作業仮説のなかで、高宮廣衛らが報告した鳩間島中森貝塚出土のボーンポイントの用途・機能を「細小の器形からみてヤスよりは鏃と見るべきであろう」（国分1972）と推察し、鏃を用いた弓射の技術が南方より入ってきたものであろうとして、台湾との関連性を指摘している。

この国分の鏃としての用途・機能推定に対し、牛沢百合子は石垣市仲筋貝塚の報告において「尖頭器（茎をもつ鏃の形をした尖頭器）」の名称を与え、当該製品の説明のなかで「全体に細長くしゃしゃなつくりである。これらは狩猟に使用したとするより、やはりヤスとして漁具などに利用されていたと考える方がよいと思われる。」と、突き道具であるヤス、すなわち漁具としての用途・機能を推定している（関口他1981）。

以上が、当該製品の用途・機能推定に関する八重山諸島地域の研究状況である。一方、報告例が若干後出するうえ、八重山諸島地域に比して極端に事例数が少ない宮古諸島地域では「骨製矢じり？」（砂辺(編)1999），「骨鏃」（砂辺(編)1999），「鏃」（羽方2003），「骨鏃と思われる」（砂辺・宮城2003）と、八重山諸島地域とは異なり、鏃すなわち「矢じり」としての名称が定着しつつある。

しかし、その名称を定着せしめた具体的な根拠などが確にされておらず、判然としない。

3. 形態分類

管見の限り、これまでに宮古・八重山諸島のグスク時代遺跡より出土している当該製品は、19遺跡119点以上におよぶ（図1, 表1）。その内訳は、宮古諸島で6遺跡13点、八重山諸島で13遺跡106点（うち未製品16点、粗加工品7点）と、遺跡数、点数とも八重山諸島が凌駕している。

両地域の遺跡数、点数をさらに比較してみると、遺跡数においては、八重山諸島地域が宮古諸島地域に比して約2.7倍であるのに対し、点数では約8.2倍と圧倒的優位を占めている。

このことは、調査件数の多寡や各々の遺跡の調査規模の差異に起因しているということだけでは片づけられない他の要因が考えられるが、このことについては後節において検討するとして、以下において製品の形態などの具備する属性について検討する。

はじめに、形態分類について検討を行う。既報告において当該製品の形態分類について述べられた報文は、次に紹介する2遺跡例である。

その一つが、石垣市山原貝塚出土資料に関して示された分類である（滝口(編)1960）。当該報告においては、茎（柄）の有無により、A形=茎を有するもの、B形=茎を有しないものに二大別され、さらにA形は軸（身部）の仕上げ法により、多面形と丸形があるとしている。

他の一つが、石垣市仲筋貝塚出土資料に関して示された分類である（関口(他)1981）。当該報告においては、以下の5タイプに細分されている。

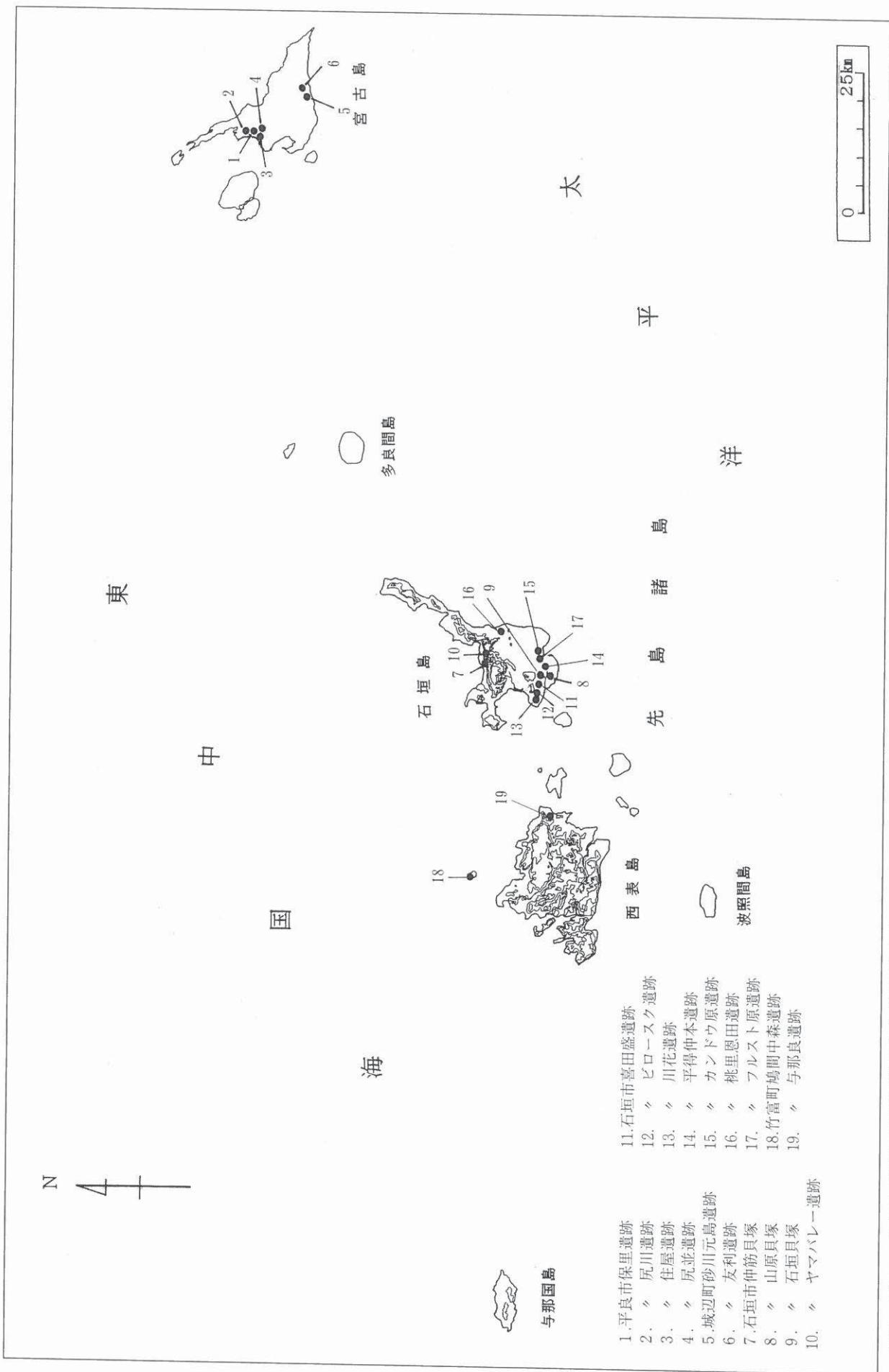


図1 宮古・八重山諸島の骨鏡様製品出土遺跡分布図

表1 宮古・八重山諸島のグスク時代出土の骨鏃様製品一覧

()は欠損値の残存値

	遺跡名	素材種・部位	図NO	身 部			茎部長さ	重量	分類	備考	報告書図	文献
				長さ	幅	厚さ						
1	平良市保里遺跡	種・部位不明	—	(4.77)	1.00	0.70	2.00	(3.20)		尖端・茎端部欠	(PL16)	砂辺(編)1999
2		ク	—	(4.63)	0.70	0.70	1.51	(2.00)		尖端欠	(PL17)	
3	平良市尻川遺跡	ク	—	5.40	0.70	0.40	—	1.60		完存	第41図2	砂辺・宮城(編)2003
4		ジュゴン:股骨	図3-16	(4.60)	0.84	0.63	—	(2.70)	II b	尖端・茎端部欠	〃3	
5	平良市尻川遺跡	ジュゴン:部位不明	—	(3.25)	1.00	0.90	—	(2.40)		クク	〃4	
6		ウシ:中足骨	—	3.50	0.83	0.75	—	(1.70)		茎端部欠	p222写真図版4	砂辺(編)1999
7	平良市住屋遺跡	ク	—	(4.20)	0.75	0.75	(0.90)	(1.90)		尖端・茎端部欠	〃5	
8		ク	—	(4.10)	0.90	0.70	(1.50)	(1.90)		クク	〃6	
9	平良市尻並遺跡	ク	—	2.60	0.90	—	—	(1.70)		茎端部欠	〃7	
11	平良市尻並遺跡	ジュゴン:肋骨	図2-3	4.30	0.94	—	—	(2.20)	II a	茎端部欠	第51図3	羽方(編)2003
12	城辺町砂川元島遺跡	ウシ:中足骨	図2-27	6.60	1.00	0.60	1.90	3.65	ク	完存	未報告	2001年2月発掘
13	城辺町友利遺跡	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	下地和宏教示
14	石垣市仲筋貝塚	ウシ:四肢骨	図2-22	(6.10)	0.90	0.80	2.00	—	II a	尖端欠	f i g. 17-1	関口(他)1981
15		ク	図2-23	(4.10)	0.90	0.60	(1.00)	—	ク	尖端・茎端部欠	〃2	
16		ク	図3-20	(6.90)	0.90	0.50	(1.10)	—	II c	尖端・茎端部欠	〃3	
17		ク	図3-21	(5.80)	0.80	0.50	(1.20)	—	ク	尖端欠	〃4	
18		ク	図2-24	(5.20)	0.70	0.50	(1.80)	—	II a	尖端欠	〃5	
19	石垣市山原貝塚	—	(2.50)	4.50	0.50	—	—	—	—	身部のみ	第44図4	滝口(編)1960
20		—	(2.10)	0.50	0.40	(0.15)	—	—	—	尖端・茎端部欠	〃5	
21		—	(1.35)	0.60	0.30	—	—	—	—	身部のみ	〃6	
22		—	(1.65)	0.40	0.20	—	—	—	—	ク	〃7	
23		—	図2-25	(5.60)	0.60	0.30	(1.20)	—	II a	尖端・茎端部欠	〃8	
24		—	図3-18	(5.70)	0.70	0.50	1.30	—	II b	尖端欠	〃9	
25		—	図2-26	(4.80)	0.80	0.50	(0.30)	—	II a	尖端・茎端部欠	〃10	
26		—	(3.30)	0.70	0.50	(0.55)	—	—	—	ク	〃11	
27		—	(4.85)	0.35	0.25	—	—	—	—	茎部欠	〃12	
28		—	(4.00)	0.50	0.30	—	—	—	—	ク	〃13	
29		—	(3.30)	0.40	0.25	—	—	—	—	ク	〃14	
30		—	(3.10)	0.45	0.35	—	—	—	—	ク	〃15	
31		—	(2.80)	0.40	0.30	—	—	—	—	ク	〃16	
32		—	(3.60)	0.40	0.35	(0.40)	—	—	—	ク	〃17	
33	石垣市石垣貝塚	—	図2-1	—	—	—	—	—	I	完存	図版13-1	阿利・岸本1984
34		—	—	—	—	—	—	—	—	茎端部欠	〃2	
36		—	—	—	—	—	—	—	—	尖端部欠	〃3	
37		—	—	—	—	—	—	—	—	尖端・茎端部欠	〃4	
38	石垣市石垣貝塚	ウシ:脛骨?	図3-31	(4.20)	0.80	0.69	2.00	(1.97)	II c	身部のほぼ中央部より先を欠	—	下地(他)1993
39		ク	図2-29	(6.01)	0.70	0.60	1.40	(2.36)	II a	尖端部欠	—	
40		ウシ:脛骨?	—	5.92	0.70	0.45	—	2.94	—	未製品	図版75	
41		ク	図2-30	(5.60)	2.10	0.50	(2.10)	(1.51)	II a	尖端・茎端部欠	—	
42		ジュゴン:肋骨	—	(6.80)	0.60	0.40	(0.10)	(1.40)	—	茎部欠	—	
43		ク	図2-31	(5.35)	0.60	0.50	1.40	(1.19)	II a	尖端部欠	—	
44		ウシ:脛骨?	図3-26	(6.60)	0.65	0.40	(1.20)	(2.06)	II b	尖端・茎端部欠	—	
45		ク	図2-6	(5.45)	0.75	0.45	2.20	(2.62)	II a	尖端部欠	—	
46		ク	—	(9.50)	0.70	0.45	—	(4.59)	—	未製品	—	
47		ク	—	8.45	1.10	0.70	—	6.26	—	ク。茎様を成形。	—	
49		ク	—	(12.90)	1.10	0.85	—	(8.99)	—	ク。茎様を成形。	図版76	
50		ク	—	13.15	1.10	0.80	—	10.48	—	ク	ク	
51		ク	—	13.60	0.90	0.70	—	10.48	—	ク	ク	
52		ク	—	11.20	1.00	0.80	—	10.77	—	ク	ク	
53		ク	図3-29	(4.10)	0.69	0.58	1.50	(1.17)	II c	身部のほぼ中央部より先を欠	—	
54		ク	図3-1	(6.65)	0.70	0.60	1.70	(1.53)	II a	尖端部欠	—	
55		ク	図3-27	(4.90)	0.65	0.70	(1.20)	(1.73)	II c	尖端・茎端部欠	—	
56		ク	図3-28	(4.10)	0.60	0.40	(0.40)	(0.94)	ク	尖端・茎端部欠	—	
		ク	図2-9	(5.80)	0.70	0.60	(0.80)	(1.73)	II a	茎端部欠	—	

59	石垣市石垣貝塚	タ	図2-28	(5.20)	0.60	0.50	1.45	(1.58)	タ	タ		下地(他)1993
60		タ	図3-19	(5.90)	0.60	0.45	(0.30)	(1.14)	II b	尖端・茎端欠		
61		タ	図3-2	(3.90)	0.50	0.30	(0.70)	(0.54)	II a	茎端部欠		
62		—	(7.70)	0.59			1.50			尖端部欠	PL15-4	
63	石垣市ヤマバレー遺跡	—	—	5.00	0.78	0.53	1.60			完存	タ 5	下地1993(宅地建設に伴う調査)
64			図3-24	(2.60)	0.50	0.50	(0.35)		II c	尖端・茎部欠	Fig.10-10	
65			図3-23	(5.10)	0.70	0.70	(1.80)		タ	尖端・茎端欠	タ 11	三上(編)1980
66			図3-22	(8.60)	0.80	0.70	2.20		タ	尖端部欠	タ 12	
67	石垣市喜田盛遺跡	ウシ:大軀骨	図3-12	5.70	0.70	0.60	1.00	2.00	II b	タ	第55図1	大濱(編)2004
68		タ	図3-20	(5.40)	0.50	0.50	(0.90)	(1.70)	II a	茎端部欠	タ 2	
69		タ	図3-9	4.10	0.60	0.60	—	1.30	II b	尖端・茎部欠	タ 3	
70		タ	図2-21	(3.10)	0.70	0.70	—	(1.50)	II a	タ	タ 4	
71		タ	—	(5.40)	0.70	0.50	—	(2.50)		未製品	タ 5	
72		タ	—	(5.70)	1.00	1.00	—	(3.20)		タ	タ 6	
73		タ	—	(11.30)	1.00	1.00	—	(9.50)		タ	タ 7	
74		タ	—	10.10	1.00	1.00	—	5.60		タ	タ 8	
75	石垣市ビロースク遺跡	—	(5.50)	1.00	1.20	—			タ	第31図49	金武(他)1983	
76		—	(5.70)	—	—	—	(5.00)			未製品。茎様を成形。	タ 51	
77		—	(3.90)	—	—	—	(5.00)			尖端部のみ。幅が大きく他の製品の可能性あり。	タ 52	
78		—	5.50	1.00	0.80	2.05				完存。粗加工品。	タ 53	
79			図3-17	(4.20)	—	—	(1.20)		II b	尖端・茎部欠	タ 54	
80		—	(4.10)	—	—	(0.10)				尖端・茎部欠	タ 55	
81	石垣市川花遺跡	ジュゴン:肋骨	図2-7	(4.10)	0.90	0.80	(0.10)	(2.20)	II a	茎部欠		未報告
82	石垣市平得仲本御嶽遺跡	ウシ:脛骨?	—	(2.61)	0.30	0.30	—	(0.32)		尖端・茎部欠	第15図6(図版2-3-4)	当真(編)1976
83		タ	図2-18	(3.20)	0.26	0.50	(0.30)	(1.15)	II a	尖端・茎部欠	第15図5(図版2-3-5)	
84		タ	図2-8	(3.20)	0.60	0.50	—	(0.93)	タ	尖端・茎部欠	第15図7(図版2-3-6)	
85	石垣市カンドウ原遺跡		図3-3	(3.20)	0.75	0.80	—		タ	尖端・茎部欠	第30図	大城(他)1984
86			図3-8	(3.80)	0.80	(0.50)	(0.40)		II b	タ	タ	
87			図3-4	(3.70)	0.65	0.65	(0.10)		II a	タ	タ	
88			図2-4	5.90	0.60	0.50	1.50	II a	完存		第6図15	
89		骨製	図2-13	(6.45)	0.70	0.70	(0.10)		タ	尖端・茎部欠	表紙図1	
90		タ	図2-14	(4.00)	0.80	0.60	(1.70)	(1.90)	タ	尖端・茎端部欠	表紙図2(第14図9)	
91		タ	—	(4.40)	0.80	0.50	—			未製品?	表紙図3(第14図15)	
92		タ	図2-15	(3.90)	0.80	0.70	(0.30)		II a	尖端・茎端部欠	表紙図4(第14図7)	
93		種不明:牙(犬歯)	図2-10	(4.20)	0.60	0.50	1.60		タ	尖端部欠	表紙図5	
94		タ タ	—	(6.90)	0.80	0.60	—			未製品?	表紙図6(第14図3)	
95		タ タ	図2-11	(7.50)	0.80	0.60	(0.30)	(3.80)	II a	尖端・茎部欠	表紙図7(第14図2)	
96		骨製	図2-12	(5.50)	0.50	0.50	—		タ タ		表紙図8	
97		タ	図3-5	(3.20)	0.60	0.40	—		II b	タ タ	表紙図9(第14図6)	
98		タ	図3-6	3.40	0.70	0.40	(0.80)		タ	完存	表紙図10	
99		タ	—	(2.70)	0.50	0.40	—			茎部欠	タ 11	名嘉(他)1978:(表紙図), 当真(編)1983:(第14図)
100		種不明:牙(犬歯)	図2-17	(4.60)	0.60	0.50	—		II a	尖端・茎部欠	表紙図12(第14図10)	
101		骨製	図2-16	(4.40)	0.60	0.60	(0.60)		タ タ		表紙図13	
102		タ	図3-7	(3.30)	0.70	0.30	(0.30)		II b	タ タ:身部に火を受けた跡が認められる	表紙図14(第14図16)	
103		タ	—					—		未製品	表紙図15(第14図14)	
104	石垣市桃里恩田遺跡	イノシ:四肢骨?	—	(5.70)	1.20	1.10	—	(2.00)		尖端欠	第10図3	阿利・黒島(編)1982

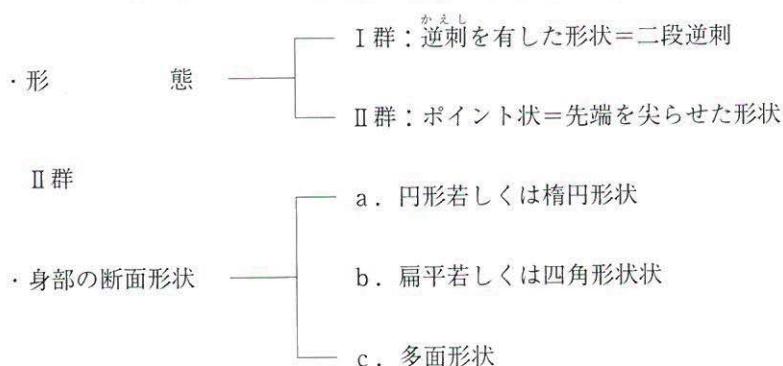
105	石垣市フルスト原遺跡	ウシ：脛骨？	図2-5	(4.86)	0.50	0.50	1.1 (報告書より)		II a	尖端・茎部欠 (茎部は新しい折損)	第13図6	阿利・岸本1984
106		—	(4.20)	0.85	0.70	(0.40)				尖端・茎部欠。 粗加工。	〃7	
107		図3-13	(2.30)	0.85	0.50	1.10	(1.43)	II b		身部上半欠・茎 部欠。粗加工。	〃8	
108		ウシ：脛骨？	図2-2	4.50	0.70	0.60	1.60	2.00	II a	完存。鰐の有る 黒褐色を呈す。	第14図4	
109		—	(6.60)	0.80	0.80	(1.70)				尖端・茎端部欠。 粗加工。	〃5	
110		ウシ：脛骨？	図3-31	(4.80)	0.70	0.70	2.10	(1.87)	II c	身部上半欠	〃6	
111		—	(5.40)	0.90	0.85	(0.40)				茎部欠。粗加工。	〃7	
112		ウシ：脛骨？	—	(3.60)	0.85	0.80	—			身部のみ。粗加 工。	〃8	
113		—	(4.86)	0.73	0.73	—	1.92			茎部欠。粗加工。	〃9	
114	竹富町鶴間中森貝塚	長肢骨	—	7.20						完存	図版VIg	高宮・C、W、ミーヤ ン1959
115	竹富町与那良遺跡	ウシ：脛骨？	図3-11	(6.12)	0.70	0.50	1.30	(1.81)	II b	尖端部欠	fig.11-6	三上(編)1982
116		〃	図2-19	(5.20)	0.60	0.50	(0.01)	(1.45)	II a	茎部欠	〃7	
117		〃	図3-14	(1.40)	0.60	0.50	1.36	(0.61)	II b	身部上半欠	〃8	
118		〃	図3-32	(3.45)	0.60	0.50	1.29	(1.22)	II c	尖端部欠	〃9	
119		〃	図3-10	(3.75)	0.60	0.50	1.40	(1.22)	II b	尖端部欠	〃10	

①断面が円形に近くふくらむもの。当初は多角形をなしていたのであろう。②断面が、やや扁平な橢円形となるもの。③細長いタイプで、鏃身の両側が少し反り返るようになるもの。断面は扁平な四角形に近い。表面には刃器で削った面がそのまま残っている。④細長いタイプ。⑤細長く、断面が円形に近いもの、としている。

これらの分類をもとに、筆者の分類試案を提示する。なお、分類基準の対象としたのは、総出土数119点のうち、未製品および粗加工品の23点を除いた96点である。

はじめに、これらの形態的特徴として、1点の：かえし逆刺を有した形状のもの（図2-1）（阿利・岸本1984）を除けば、他はその名称にも表出されているように、有茎（柄）で先端を尖らせてポイント状に仕上げるという必要条件を具備している。したがって、石垣市山原貝塚で示されたB形（滝口((編))1960）は、茎（柄）部が消失した無茎（柄）のものは基本的には存在しないものと考える。なお、報文によっては無茎としたものもあるが（当真(編)1983など）、筆者はこれらは製作途上の未製品とみなしている。また、仲筋貝塚で示された細長いとか、鏃身が少し反り返るなどの細分は全体のヴァリエーションの範囲内として捉えて良いものと考えられ、分類上における基本的な差異ではないであろう。

のことから、筆者は以下に示すように、分類にあたっての形態を二大別し、その圧倒的多数を占めるII群を「身部の断面形状」によって、a. 円形若しくは橢円形状、b. 扁平若しくは四角形状、c. 多面形状のII群3種に分類、細分した。これらの組み合わせによってI群、II群a、II群b、II群cの4種が存在するが、II群aとcは必ずしも明確な判別が容易でないものもある。また、cはa



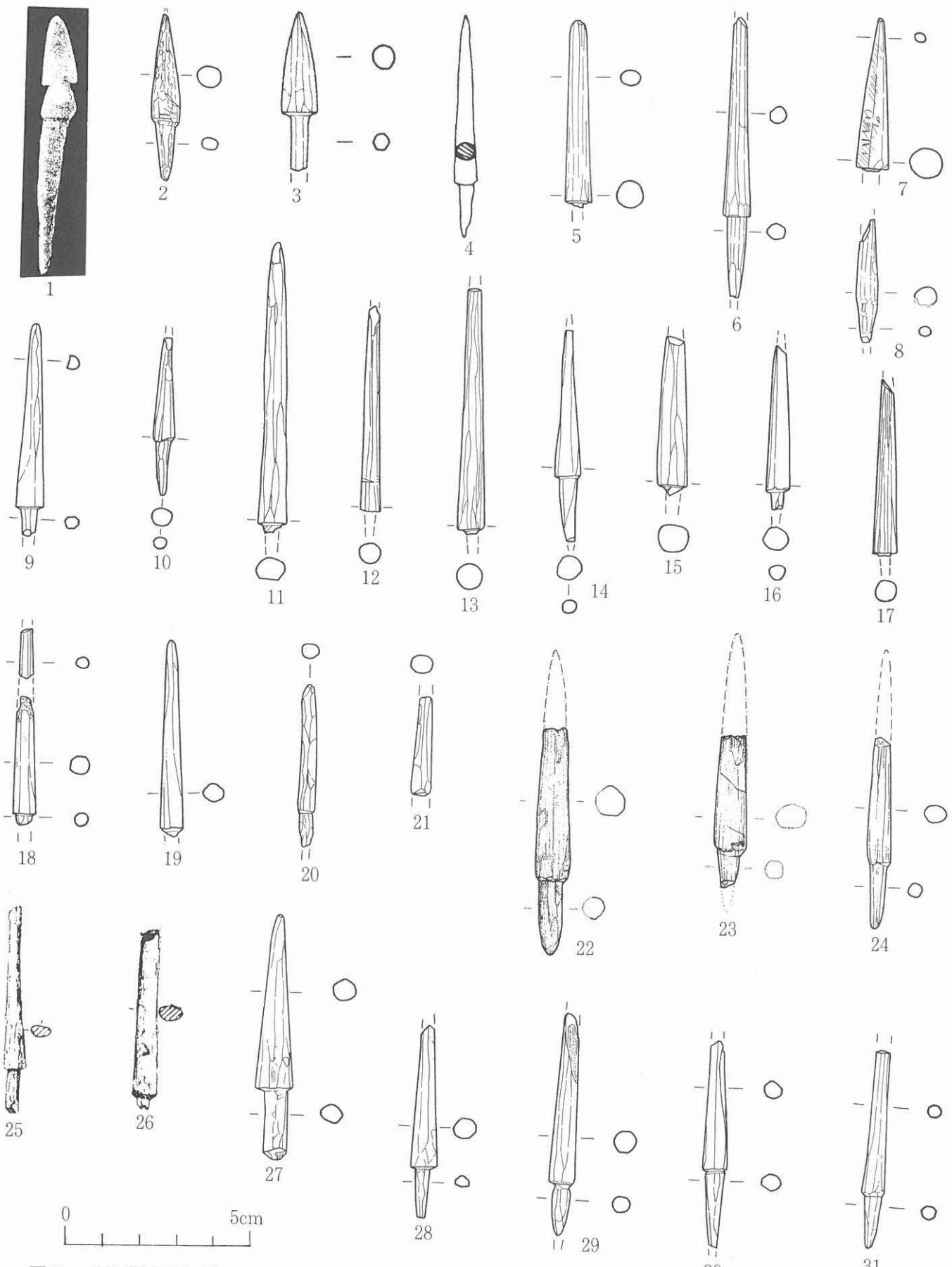


図2 骨鏃様製品実測図・1(丸若しくは梢円形形状)

1・25~26(山原貝塚), 2・5(フルト原遺跡), 3(尻並遺跡), 4・5, 10~17(カントウ原遺跡), 6・9・28~31(石垣貝塚), 7(川花遺跡), 8・18(平得仲本御嶽遺跡), 19(与那良遺跡), 20~21(喜田盛遺跡), 22~24(仲筋貝塚), 27(砂川元島遺跡)

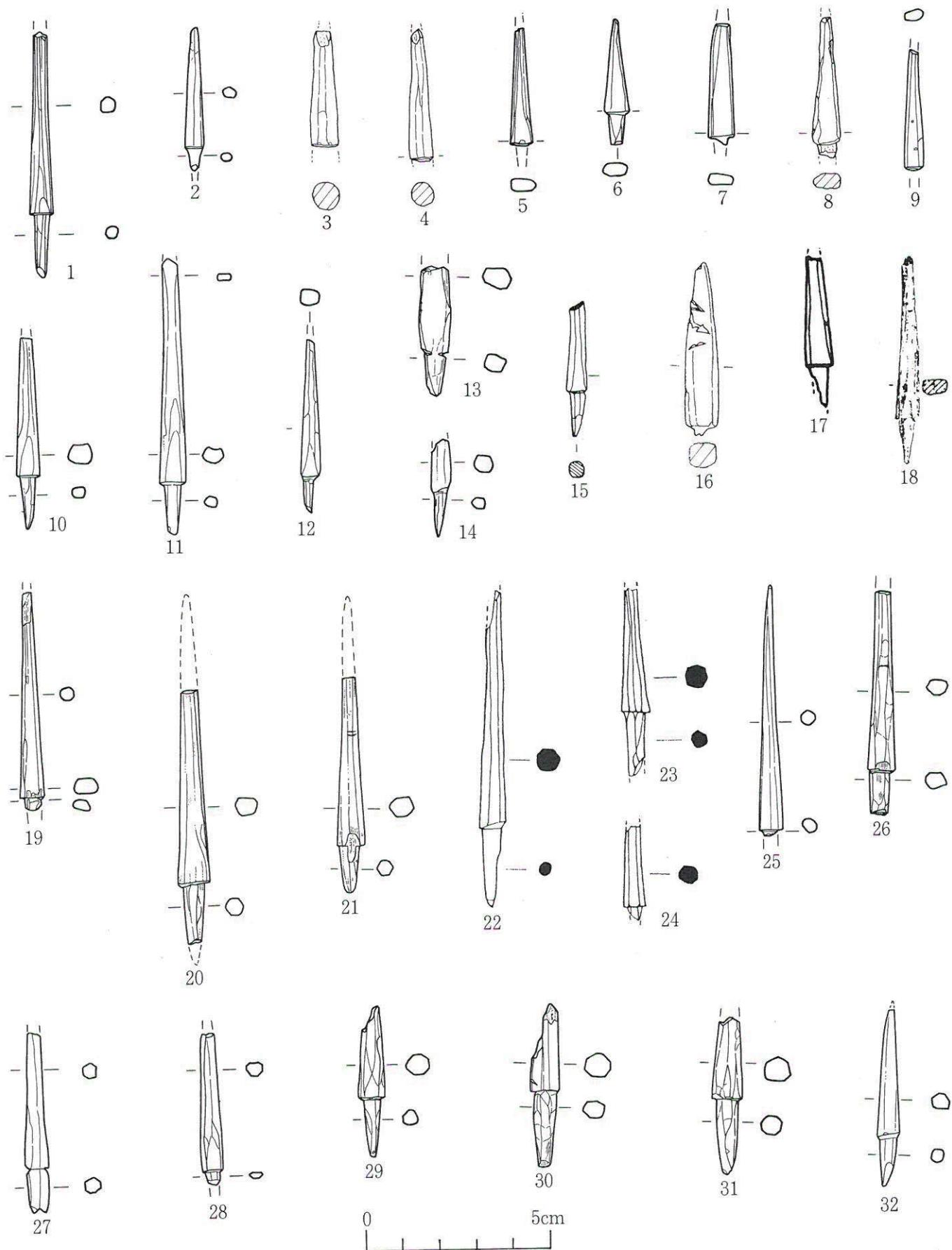


図3 骨鏃様製品実測図・1～4(丸若しくは楕円形形状), 5～19(扁平若しくは長方形形状), 20～31(多面形状)

1～2・19・26～31(石垣貝塚), 3～8(カンドウ原遺跡), 9・12(喜田盛遺跡), 10・11・14・32(与那良遺跡), 13・15・30(フルト原遺跡), 16(尻川遺跡), 17(ヒロスク遺跡), 18(山原貝塚), 20～21(仲筋貝塚), 22～24(ヤマバレー遺跡)

の製作上におけるプロセス的なものの可能性を含んでいるものもあるかも知れないということも指摘しておきたい。さらには、身部の基礎部と先端部が異なった形状をなすものもあり、当該分類がはたして如何ほどの意味を有するものかは今後の検討課題としておきたい。

このように、多少の課題も内包しているが、総体的にみた場合、Ⅱ群aが最も多く、Ⅱ群bがこれに次いでいる。そして、Ⅱbは極少である。

4. 法量の比較

茎(柄)や身部の尖端などを欠失する資料が少なくなく、身部の長さ、幅、厚さ、茎(枝)部の長さ、重量などが知り得る資料は多くなく、総数119点のうち、完存品は8点のわずか6.7%に過ぎない。

このように、完存品が極少の状況にあるが、計測し得た資料の身部および茎(枝)部の長さ比較を見てみよう。

身部資料は、総数107点のうち、14.9%にあたる16点が完存している。これらは石垣市石垣貝塚出土の13.6cm例を最長、平良市住屋遺跡出土の2.6cm例を最短とし、平均長は7.37cmである。また、茎(枝)部資料は総数66点のうち、40.9%にあたる27点が完存している。これらは、石垣市石垣貝塚およびヤマバレー遺跡出土の2.2cm例を最長、喜田盛遺跡の1.0cm例を最短とし、平均長は1.58cmである。

のことから、身部長は8～12cmの囲をピークとする一群と、量的には少ないが1～3cmの範囲に集中部が見られる小型の一群に大別されよう、茎(枝)部長は2cmを超える資料も4点あるが、概ね1～2cm長の範囲に集約されていたことが判る。

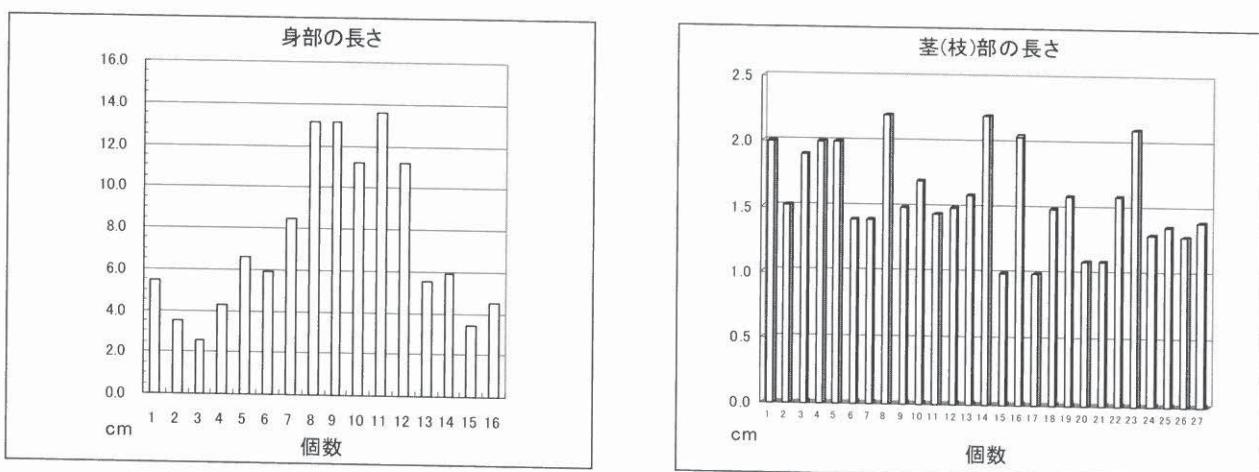


図4 身部長および茎(枝)部長の比較

5. 製品の素材と部位

全資料中のうち、使用素材の種などが明らかとなっているものは56点である。これらの種類としては、イノシシの四肢骨（石垣市桃里恩田遺跡）、イノシシの犬歯（石垣市カンドウ原遺跡）、ウシの四肢骨？（石垣市仲筋貝塚）、ウシの脛骨（石垣市石垣貝塚、竹富町与那良遺跡）、ウシの大脚骨（石垣市喜田盛遺跡）、ジュゴンの肋骨（平良市尻並遺跡、同市尻川遺跡）と、動物種としてはイノシシ、ウシ、ジュゴンの4種があり、その部位としては四肢骨、犬歯、脛骨、肋骨の4部位が知られる。

なお、石垣市石垣貝塚（下地（他）1993）やビロースク遺跡（金武（他）1983）においては、エイの尾棘製品もこれらと同様に扱っているが、当該製品については、沖縄諸島域の先史時代にも出土例が

あることや（盛本2004），検討の対象としている他の資料群とは形態上の差異などにおいて，同一のものではないと考えることから，ここでは割愛した。

この中で，最も多いのはウシの脛骨や大腿骨などの四肢骨の比較的厚みのある部分を縦位に裂いて，整形・加工したものが多い。このことは，伴出する少なない未製品（製作途上品）などから明らかである。

なお，ウシの四肢骨は遺存骨においては部位の判別が可能であるが，製品として加工，仕上げられたものになると，部位レベルまでの特定は容易でない。ただ，言えることは未製品（製作途上品）などからして，素材段階で長さ15cm前後の真っ直ぐで，かつ2cm前後の厚みが必要条件とされていたことが判る。この条件を満たせるものは自ずと脛骨や大腿骨などに限定されよう。

6. 資料の時期と形態の変遷

まず，時期的な出土状況であるが，将来的に伴出する土器や陶磁器などの細分研究の進展によって，さらに詳細な変遷が把握可能になるかと思うが，現段階では大きくみて下記の二段階に大別されよう。

その一つは，当該製品の出現期である14C初頭段階で，他の一つがこれに後続する14C中葉～16Cである（図5）。

そして，17C段階になると当該製品は完全に消滅してしまう。

〔第一期：14C初頭頃〕

当該期の資料は，次段階に比して多くなく，宮古諸島に3点，八重山諸島に9点が知られるのみである。宮古諸島では，野城式土器（下地1978・'98）に後続し，元島系土器に先行するとされる土器群（住屋式土器と仮称：住屋遺跡の第3層に併行）（砂辺（編）1999）に伴出し，14C初頭頃に位置づけられている平良市保里遺跡出土の2点と同市住屋遺跡第3層出土の1点がある。そして，八重山諸島では14～16Cに位置づけられている中森期（金武1994・2004）の初期段階？に属すると思われる石垣市ビロースク遺跡出土の7点，同市川花遺跡出土の1点，同市桃里恩田遺跡出土の1点があるのみである。

〔第二期：14C中葉～16C代〕

14C中葉頃～15Cまでと，16C代を細分する必要があるものと考えるが，上記した理由で現段階では一括で扱う。当該期になると，前段階に比して飛躍的な資料の増加傾向が見られる。とりわけ，八重山諸島に顕著で，1遺跡における出土量も増えてくる。

宮古諸島では平良市尻川遺跡，同市尻並遺跡，城辺町友利遺跡，同町砂川元島遺跡などからの出土があるが，尻川遺跡出土の4点が最多で，他遺跡は1～2点と出土数は貧弱である。しかし，八重山諸島では報告例の古い石垣市山原貝塚の21点，同市カンドウバル遺跡の19点（未製品：3），同市石

地域	世紀	12	13	14	15	16	17～	備考
宮古諸島	野城式土器			住屋式土器（仮称）				
八重山諸島	新里村期			中森期		パナリ期	金武編年 (金武1994・2004)	
				第三期		第四期	早稻田編年 (滝口(編)1960)	

図5 出土時期と変遷

垣貝塚の25点（未製品：7），同市フルスト原遺跡の9点（粗加工：6），同市喜田盛遺跡の8点（内未製品4点），竹富町与那良遺跡の5点と，5点以上の出土遺跡が3遺跡，15点以上の出土遺跡が3遺跡もある。とりわけ，カンドウバル跡遺跡や山原貝塚，石垣貝塚などは15点以上と傑出して多い。もちろん，遺跡の調査規模等も考慮にいれなければならないが，このあり方は，何かを示唆しているものと思われる。石垣市八重山博物館前から天川御嶽前に至る県道：真栄里新川線（通称2号線）改良工事に伴う調査（仮称：登野城貝塚）でも25点以上が出土している³⁾。なお，当該貝塚は中森式土器を主体とした，早稻田編年の第三期（滝口（編）1960）に属する15C～16C頃の集落跡とみられる遺跡である。

このように，現段階においては，宮古・八重山諸島の両地域とも14Cの初頭段階に出現し，以後16C代まで形態上においては大きな変化も遂げずに継続していくが，17C以降の第四期（滝口（編）1960），パナリ期（金武1994・2004）段階になると両地域とも一斉に消滅する。

7. 用途・機能および系譜など

用途・機能および系譜などを検討するにあたって，当該製品の具備する属性や出土遺跡の性格などをみてみよう。まず，形態の基本的な特徴であるが，3. でも記したように，1点のI群（図2-1）を除けば，他はすべてII群としたものである。これらのすべてが有茎（柄）である点に関しては，小林行雄が指摘する「骨角牙鏃は各時代に用いられているが，材料の関係や加工の容易のためか，有茎の形が多く，無茎がすくない」（小林1959）ということからも首肯できよう。そして，形態的特徴からして，II群は沖縄諸島の勝連町勝連城跡出土の骨鏃のII類（上原（編）1990）に対比できよう。上原靜は，このII類の出自は共伴する鉄鏃のIII類（丸きり頭式）の模倣であろうとともに，「骨鏃は金属器の代用品ではあるが，革製の鎧（どうまる：胴丸）に対して十分な貫通力があり、当時の武器との関連で考案された合理的な武器であった」とする（上原2003）。

では，これらの出土遺跡の性格というと，第一期に属する八重山諸島の石垣市ビロースク遺跡，同市川花遺跡，同市桃里恩田遺跡などは，標高18～40mの独立丘陵若しくは丘陵台地上などに立地することなどから，防御的な性格を有している遺跡と見られる。宮古諸島の同段階に属する平良市保里遺跡や住屋遺跡もこれまでの調査地点は，標高11～18mの低平な琉球石灰岩台地上に立地しているグスク時代初頭の集落跡的な様相を呈した遺跡であるが，近隣にグスクの首長である按司の居住伝承などが伝えられている場所を控えており，防御的性格の可能性が高い遺跡である⁴⁾。

しかし，第二期の遺跡はその多くが低平な台地や砂丘上に立地し，建物に関与するピット群や墓などが検出されていることから，より集落的な性格が強い。とりわけ，石垣市カンドウ原遺跡や石垣貝塚，喜田盛遺跡などは砂丘上に営まれた15C～16C代の集落跡である。また，当該期の出土遺跡には貝塚も含まれており，石垣市の仲筋貝塚は15C中葉～同後半代の比較的短期間に形成された貝塚である。

そして，個々の遺物でさほど多くはないが，石垣市フルスト原遺跡（図2-2）やカンドウ原遺跡（図3-7）や竹富町与那良遺跡（図3-11）例においては，身部などが黒褐色を呈するとともに，光沢を帯びた艶のある部分が観察された。ちなみに，フルスト原遺跡例は部分的ではなく全面におよんでいる。このことは，当該製品の強靱さを增幅させる目的から火にかけて焙っているのである。したがって，当該製品はより強靱でなければいけなかったのである。このようなことから，石垣市仲筋貝塚で指摘されているように，「きやしゃ」ということはあてはまらないであろう。

このような諸点をふまえて，総合的に考慮した場合，当該製品は突き道具としてのヤス⁵⁾とみるよ

りも、飛び道具としての鏃として捉えた方が理解し易いのであろうと考える。このことは、サンゴ礁に囲繞された奄美諸島以南の地域においては、網魚などに比して突き魚はさほど発達をみなかつた、ということもヤスとしての立場には立てない理由の一つである。

そして、第一期の段階において防御的な性格を有した遺跡、すなわちグスクの発生とともに武器として出現したであらう。このことは、本来ならば鉄製族でなければならなかつたモノが、鉄素材の貧弱さから当該製品に材質置換して現れた結果である。しかし、第二期の段階になると、出土遺跡の性格が集落や貝塚などに変わっていくことから、現段階では武器以外の例えは、国分直一の推定した狩猟具などに用途・機能も変化して行ったのであらうと考えておきたい。

本稿をまとめるにあたって、下記の機関、個人にお世話にあつた。銘記して謝意を申し上げるしだいである。大濱憲二、大濱永寛、大竹憲治、下地和宏、下地 傑、砂辺和正、手塚直樹・永瀬史人、石垣市教育委員会、城辺町教育委員会、平良市教育委員会。また、図の浄書にあたつては、上原園子、喜屋武朋子、野村知子、譜久里昌代、外間瞳さんの手を煩わせた。同様に銘記して感謝申し上げる。

(もりもといさお：調査課課長)

【註】

- 1) 大濱永亘は、八重山地域の当該時代を地域的呼称を重視して「スク時代」と称している(大濱1985)。グスク時代の遺跡の性格等を考慮すれば、地域的特色を表徴する呼称として、弁別する見解には賛同でき、新里貴之も一定の評価を行っているが(新里2004)、琉球列島全域の時代呼称として学史的にも「グスク時代」が定着していることから、あえて地域的呼称を時代名称として使用すると、いたずらに混乱を招く恐れがある。そのため、筆者はあえて「グスク時代」を使用する。
- 2) 金武正紀は早稻田編年(滝口宏(編)1960)の第三期を、自ら中心となって実施した石垣島ビロースク遺跡や竹富島新里村東および西遺跡などの調査成果を踏まえて、共同調査者の阿利直治・金城亀信との連名で、在地土器の特徴や(新里2004)や舶載陶磁器のあり方などから、前・後半に細分し、前半期を新里村期(12~13C)、後半期を中森期(13末~16C)とする編年案を提示している(金武1994)。その後の論考で、新里村期を12後半~13C、中森期を14~16Cと、若干修正を行っているものの(金武2004)、概ね上記の年代観で把握してよいであらう。
- 3) なお、当該調査は現在継続中であることから、一覧表にも加えていない。調査担当者の大濱永寛のご厚意で実見させてもらった。
- 4) なお、当該遺跡の西へ約100m程離れた標高約20mの石灰岩台地上に保里(フサテイ)御嶽があるが、『平良市史・第9巻(資料編7・御嶽編)』によると、当該御嶽は「14世紀頃の人で西仲宗根の首長保里天太の居城跡と伝えられている」と記載されている。
- 5) 1910(明治43)年に農商務省から発行された『日本水産捕誌』では「尖頭鋭利なる鉄鉤に木製若しくは竹製の柄を付け其柄を把時して水中の魚貝類を突るの具」と定義されているという(直良1973)。

【参考文献】

- 笹間良彦、1997：弓矢・鏃・胡？。『図録 日本の甲冑武具事典』。pp389~399。柏書房。東京。
- 上原靜・編、1990：勝連城跡-北貝塚、二の郭および三の郭の遺構調査-(1)。勝連町の文化財第11集。勝連町教育委員会。沖縄県勝連町。
- 上原 靜、2003：第1部 沖縄諸島の先史・原始時代 第4章 グスク時代 第5節 一 主な武器と武具 1 鏃。
- 沖縄県史 各論編 第2巻 考古』。pp316~317。沖縄県教育委員会。那覇。
- 大濱永亘、1985：八重山の先史時代を考える。石垣市史のひろば。第8号。pp 6~13。石垣市役所市史編集室。石垣。
- 金武正紀、1994：土器→無土器→土器-八重山考古学の編年試案-。南島考古。第14号 学会創立25周年記念特集号。

p83~91。沖縄考古学会。那覇。

金武正紀, 2004 : <寄稿>考古学からみた八重山の歴史。石垣市史のひろば。第27号。pp26~37。石垣市役所市史編集室。石垣。

国分直一, 1972 : 七 原始経済技術 3 弓射の技術。『南島先史時代の研究』。pp323~328。慶友社。東京。

小林行雄, 1959 : こっかくがーぞく 骨角牙鏃。『図解 考古学辞典』。pp349。東京創元社。東京。

下地和宏, 1978 : 野城(ぬぐすく)式土器について。琉大史学。第10号。pp34~49。琉球大学史学会。那覇。

下地和宏, 1998 : 「グスク時代初期の宮古」。考古学ジャーナル。NO.437。pp19~24。ニュースイエンス社。東京。

新里貴之, 2004 : 第IV章 先島諸島におけるグスク時代煮沸土器の展開とその背景。今帰仁村教育委員会(編)『グスク文化を考える 世界遺産シンポジウム <東アジアの城郭遺跡を比較して>の記録』。pp307~324。新人物往来社。東京。

直良信夫, 1973 : 繩文人の漁撈生活。季刊 どるめん。創刊号 特集: 繩文列島。JIIC(ジック)出版局。東京。

盛本 熊, 2004 : 奄美・沖縄諸島の骨角牙製品。高宮廣衛・知念勇編『考古資料大観 第12巻 貝塚後期文化』。pp 255~259。小学館。東京。

【出土遺跡報告書】

阿利直治・黒島玲子(編), 1982 : 桃里恩田遺跡－沖縄県石垣市桃里恩田遺跡試掘調査報告書－。石垣市文化財調査報告書第5号。石垣市教育委員会。石垣。

阿利直治・岸本義彦, 1984 : フルスト原遺跡発掘調査報告書。石垣市文化財調査報告書第7号。石垣市教育委員会。石垣。

大城 慧(他), 1984 : カンドウ原遺跡－灌・排水工事に係る緊急発掘調査－。沖縄県文化財調査報告書第58集。沖縄県教育委員会。那覇。

大濱憲二(編), 2004 : 喜田盛遺跡－真栄里新川線街路改良工事に伴う緊急発掘調査－。石垣市文化財調査報告書第28集。石垣市教育委員会。石垣市。

岸本義彦(編), 1984 : 山原貝塚発掘調査報告書。石垣市文化財調査報告書第8号。石垣市教育委員会。石垣市。

金武正紀(他), 1983 : ビロースク遺跡－沖縄県石垣市新川・ビロースク遺跡発掘調査報告書－。石垣市文化財調査報告書第六集。石垣市教育委員会。石垣。

下地 傑, 1993 : 石垣貝塚発掘調査報告書－宅地建設に係る記録保存調査－(ケータ-17~23区)。阿利直治・(編), 黒石川窯址－沖縄県石垣市黒石川(フーシナー)窯址発掘調査報告書－所収。pp263~323。石垣市文化財調査報告書第15号。石垣市教育委員会。石垣市。

下地 傑・他, 1993 : 石垣貝塚－県道真栄里新川線街路改修工事に伴う緊急発掘調査報告書－。石垣市文化財調査報告書第17号。石垣市教育委員会。石垣市。

砂辺和正・(編), 1999 : 保里遺跡(旧県立厚生園跡地) -県営団地建設に伴う緊急発掘調査概報-。平良市文化財調査報告書第3集。平良市教育委員会。平良。

砂辺和正・(編), 1999 : 住屋遺跡(I) -序舎建設に伴う緊急発掘調査報告書－。平良市文化財調査報告書第4集。平良市教育委員会。平良。

砂辺和正・宮城ゆりか, 2003 : 尻川遺跡－個人住宅建設予定に伴う緊急発掘調査報告書－。平良市文化財調査報告書第5集。平良市教育委員会。平良。

関口広次(他), 1981 : 沖縄・石垣島 仲筋貝塚発掘調査報告 THE EXCAVATION OF NAKASUJI SHELL-MOUND。仲筋貝塚発掘調査団。石垣。

高宮廣衛・C, W, ミーヤン, 1959 : 八重山鳩間島中森貝塚発掘概報。沖縄県教育委員会監修, 1978 『沖縄文化財調

査報告1956～1962』。pp136～150。那覇出版社。那覇。

滝口 宏(編), 1960: 八重山の考古学 石垣島<山原貝塚>。『沖縄八重山』。pp129～151。早稲田大学考古学研究室報告第7冊。早稲田大学考古学研究室。東京。

知念 勇(他), 1977: 八重山石垣島カンドウ原遺跡発掘調査報告。石垣市文化財調査報告書第2集。石垣市教育委員会。石垣市。

当真嗣一(編), 1976: 八重山石垣島平得仲本御嶽遺跡発掘調査報告。沖縄県文化財調査報告書第3集。沖縄県教育委員会。那覇。

当真嗣一(編), 1983: カンドウ原遺跡発掘調査報告(I)-排水溝に伴う緊急調査-。沖縄県文化財調査報告書第49集。沖縄県教育委員会。那覇。

名嘉正八郎・他, 1978: カンドウ原遺跡緊急発掘調査ニュース 1977年度。沖縄県教育委員会文化課。那覇。

羽方 誠(編), 2003: 尻並遺跡－那覇地方裁判所平良支部建て替えに伴う発掘調査－。沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第15集。沖縄県立埋蔵文化財センター。沖縄県西原町。

三上次男(編), 1980: 沖縄・石垣島 ヤマバレー遺跡第2次発掘調査概報。青山史学。第6号。pp1～23。青山学院大学。東京。

三上次男(編), 1982: 沖縄・西表島 与那良遺跡発掘調査概報。与那良遺跡調査団。東京。